

# 東日本大震災の津波被災地におけるローカル・アイデンティティの紡ぎ直し —宮城県名取市閑上地区における取組みを事例として—

Re-realizing local identity in the tsunami-stricken areas of the Great East Japan Earthquake:  
Case study in Yuriage, Natori city, Miyagi prefecture

学籍番号 47-196740  
氏名 鳥居 真実子 (Torii, Mamiko)  
指導教員 清水 亮 准教授

## 1. 問題の所在

東日本大震災の発生から 10 年が経過しようとしている。津波被災地の多くでは、復興計画に基づいたインフラの整備や住まいの再建など、行政として担ってきた「復興」は完了したとする動きも少なくない。津波被災地で生活する住民からは「すっかり変わってしまった」「全く違うまちが同じ場所につくられている」といった喪失の語りが聞かれる。その一方で、震災前後での変化を乗り越え、つなごうとしていく営みも見られる。本稿では、つなごうとしていく営みの内、住民による語りを通してローカル・アイデンティティの再び構築していく営みを、「ローカル・アイデンティティの紡ぎ直し」と定義して、以下の目的を明らかにする。

- ・震災前後で、津波被災地におけるローカル・アイデンティティ構築の営みはどのように変容したのか。
- ・地区住民によるローカル・アイデンティティの紡ぎ直しはいつかに行われ、続いていくのか。また、そこでは何が語られるのか。
- ・ローカル・アイデンティティの「紡ぎ直し」は被災地の〈復興〉において、どのような意味を有するのか。

この目的について、宮城県名取市閑上地区での取組みを事例として考察していく。調査方法としては、フィールドワークによるヒアリング調査 (2019/12~2020/12) 及び、地域・郷土資料等の文献調査から得られたデータをもとに分析・考察を行った。

## 2. 閑上地区にひろがっていた生活の歴史

事例地である閑上地区は、名取市の東北端に位置する、仙台平野の沿岸部沿いの大字である。10 km<sup>2</sup>ほどの広さで、2020 年 12 月現在 3,028 人が居住する。江戸時代に起源をもつ港町であり、戦後には漁師町として多くの人でにぎわいを見せた。そうした歴史を背景に、住民の閑上地区についての語りには「独特なまち」「漁師町ならではの言葉・気質」といった表現が聞かれる。その一方で、1970 年代以降は沿岸部の埋立によるベッドタウン化、と、2000 年代以降は、漁獲高が低迷する中で、漁師町としての賑わいを、ゆりあげ港朝市や閑上太鼓などを通じて見出してきた。

2011 年の震災では、震度 6 強の揺れを観測し、津波による大きな被害を受けた。震災後の人口は 2015 年の一番少ない時で約 2,000 人となり、その後、徐々に増加する

も、2020年12月時点で3,028人と、震災前の約7,000人に比べると半分以下となっている。

閑上地区は、名取市の震災復興計画(2011年10月)において「現地再建」の方針が定められ、2014年に災害公営住宅や防災集団移転団地の造成に向けた区画整理事業が始まった。この現地再建の方針に関しては、住民の間で賛否が分かれ、閑上地区を離れる決心をする人も多く従前のコミュニティが解体していった。震災復興計画に基づき、震災前にあった建物は全て取り壊され、また、震災遺構を残さない方針が定められたため、2017年までにそれらは撤去され、新たに区画の整備や建物の建設が行われた。

2019年5月には、行政の復興計画・事業の一つの区切りとしての閑上まちびらきを開催、2020年3月には名取市が復興達成を宣言した。

### 3. ローカル・アイデンティティの構築の営みの変容

#### ①震災後の喪失としての語り

閑上地区における震災前のローカル・アイデンティティ構築の営みとしては当たり前に関上地区に存在していた場や環境、人とのつながり、そういったものの総体を指摘できる。だがしかし、震災後の語りとして「自然とか風景とか、環境(がなくなった)」、「あのまちの雰囲気は、もう戻らないし」、「全く違うまちが同じ場所につくられている」という語りから、閑上地区に広がっていた生活の景色や、町内会などを拠点としたコミュニティといったものを失ったことが伺える。そうした語りに象徴されるのは、「ふるさとの喪失」(除本 2013)である。この取り戻すことの難しいふるさとの

中には、桑子(1999)のいう「空間の履歴」が積み重なっている。そして、その空間の履歴の中にこそ「わたし」という自己が存在する。自己と空間とは分かちがたいものなのである。とすると、空間の履歴が積み重なるふるさとの喪失とは、自己の喪失にもつながりうる現象であるといえる。

#### ②「継続」させていく営み

しかし、あらゆるものを喪失したのではなく、ローカル・アイデンティティ構築の営みの中にも、「継続」させていく営みが見られた。その一つが、ゆりあげ港朝市である。2013年に震災前と同じ場所に再建され、鮮魚店や青果店など約50店舗地区住民や観光客が訪れるきっかけをつくった。これは閑上地区の漁師町としてのアイデンティティを支えている文化をつなぐ象徴的な営みとして、早急に再開されたと考えられる。

しかし、単に震災前の営みを継続すればよいという訳ではない。閑上地区では、毎年8月に、盆火と言って、枝に年の数だけ饅頭を刺して炙って焼くのが習わしだった。地区住民のEさんも、それに倣い震災直後の8月に盆火をしたが、「何かが違う」という違和感があったという。まんじゅうの味や雰囲気などから、震災前とは違う、という違和感をむしろ強く意識してしまったという。

#### ③「紡ぎ直し」の営み

住民による語りを通してローカル・アイデンティティの再び構築していく「紡ぎ直し」の営みとして、本稿では語り部活動・聞き語り・復興だよりの3つの事例に着目した(復興だよりは次節で詳しく述べる)。その分析に際して、浅野(2001=2005)の自己物語論における、「他者」と「物語」の

概念に着目した。例えば、語り部では、主に閑上地区外から訪れた観光客等を「他者」として想定し、その他者も共有しやすいよう、言葉を選びながら、自身の被災経験などの「物語」を語る。また、聞き語り（震災後、Rさんを中心として、地区住民に震災前の生活、生業などを聞き書きした取り組み）では、閑上地区の住民を「他者」として想定し、その他者が色濃く「私の閑上」を感じられるよう、閑上弁での会話をそのまま聞き語りの記録として残した。このように、ローカル・アイデンティティの紡ぎ直しに際しては、その物語を共有する他者が誰なのかによって、語られる物語の内容が異なることが分かった。

#### 4. 閑上復興だよりに着目して

閑上復興だよりは、地区住民によって2011年10月から発行されてきた地域紙である。住民の声を発信する、ローカルな情報を提供するということを念頭に、2020年3月の最終号60号までを刊行した。それ以降は復興の名をとった閑上だよりとして発行を続けている。

震災復興の過程や住民の生活の変化にあわせながら細やかに記述し、「住民の声を届ける」「顔の見える新聞」として地区住民へと届けてきた。復興事業計画の中で見落とされがちだった地区に焦点を当てた「丘区の声」や、現地再建や復興事業計画に対する率直な意見など、震災後の住民の生の声が届けられた。60号の発行を通じて、多くの地区住民を巻き込みながら、読者それぞれに対して「自分にとっての閑上」を考えるきっかけを与えた。また、他の住民の物語を知る機会を通じてまた自分の物語も

紡ぎ直していく場としての特徴がある。こうした、他者との物語の共有を通じて、また自分にとってのローカル・アイデンティティが紡ぎ直されていく側面を有する。また、それらの語りは、記事の形で言語化され、その時々自分や他の地区住民が、閑上地区を認識していたのか、閑上地区やそこでの自己の生活等をどのように語ったのかという記録として残されていく側面も有する。そういった点に、復興だよりがローカル・アイデンティティの紡ぎ直しにおいて持っている意味を見出すことができる。

#### 5. ローカル・アイデンティティの紡ぎ直しと〈復興〉

津波被災地においては、履歴が積み重なる空間としてのふるさとを喪失したことで、そうした履歴をたどることができず、自分の存在を知り得ない／語り得ないという場合が生じる。それに際し、ローカル・アイデンティティは紡ぎ直すという行為を通じて、自分と地域の物語、翻って自分の物語を語り直そうとしてきた。それは、震災から時間が経過する中で、段々と自分になじむように、紡がれていく言葉である。それによって、震災後の生活の変化で感じた喪失や違和感に対して、説明しうる言葉を獲得していくのである。そういった意味で、ローカル・アイデンティティの紡ぎ直しも一種の〈復興〉のプロセスだといえよう。

渥美が、阪神・淡路大震災から10年後の時点において「語るに語り得ない、言葉にならない想いを語り伝える必要」があるとした一方で、その語り得ないものを覆い隠すドミナントストーリーが存在することを指摘するように（渥美 2004）、震災から時間が経つがゆえに、大きな主語によって構

築されるローカル・アイデンティティへと集約されていく恐れがある。閉上地区においても、「新しい閉上」や「観光地化する閉上」としてのローカル・アイデンティティの色合いが段々と濃くなっている。復興に関しては、Eさんが「よかったね、復興して」という読者からの反応をもらったことや、2020年に名取市が復興達成を宣言したことなど、だんだんと「復興は完了した」という物語ができつつあるといえる。

住民によって語られたローカル・アイデンティティは、ともすれば大きな主語によって構築されるローカル・アイデンティティによって見えづらくなってしまふ。しかし、個々人が自己と地域の物語を通じて紡ぎ直すものこそ、それぞれの生の固有性をもつローカル・アイデンティティだといえる。紡ぎ直しの営みを継続していく中でそうした生の固有性をもつローカル・アイデンティティが履歴として空間に蓄積していく。そうした、住民それぞれが生き生きした物語を通じて紡いだローカル・アイデンティティが履歴化していくことで、再び「生きられた空間」として、立ち現れていくのだと考えられる。

しかし、そうした紡ぎ直しの営みがずっと意識されるわけではない。閉上復興だよりを発行してきたEさんが「普通のまちに」なったら発行をやめると話すように、様々な他者を巻き込んで行われてきた紡ぎ直しの営みが終わりを迎えると、ローカル・アイデンティティを言語化して、語ろうという意識も薄れていくだろう。

本稿のヒアリング調査でも、震災のことだけでなく、その人自身の生い立ちや、閉上地区での生活などの語りが自然と聞かれ

た。震災だから特別ということではなく、自分の人生の中の一つの出来事として語られていくのである。

つまり、自己と地域の物語、自己の物語を紡ぎ直し続けていく中で、ある種の日常に戻っていくことや、喪失などに対する葛藤がおだやかになっていくことを意味するのかもしれない。ただそれは、震災を契機とした喪失を忘却する、ということではなく、自分の中で受け入れ、理解をしていくプロセスである。

「自分にとって今現在の閉上がどういう場所なのか」。震災やそれによる喪失をよけてとおるのではなく、受け止めて、語る意志をもつ。自分にじっくりくる物語として言葉を紡ぎ、語る事ができた場合、それもまたひとつの〈復興〉だといえると考えられる。震災から時間が経過する中で、大きな主体の物語に集約されやすい状況があるからこそ、津波被災地における住民によるローカル・アイデンティティの紡ぎ直しに意味があるといえるだろう。

#### 【参考文献】

- ・渥美公秀, 2004, 「語りのグループ・ダイナミクス: 語るに語り得ない体験から」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』30 p.160-173
- ・浅野智彦, 2001=2005, 『自己への物語論的接近 家族療法から社会学へ』, 勁草書房
- ・桑子敏雄, 1999, 『環境の哲学』, 講談社
- ・除本理史, 2013, 「福島原発事故における絶対的損失と被害補償・回復の課題 — 「ふるさとの喪失」と不動産賠償を中心に —」『経営研究』第64巻 3号 p.25-41
- ・大堀研, 2010 「ローカル・アイデンティティの複合性—概念の使用法に関する検討—」『社会科学研究』61巻 5-6号 p.143-158